

週刊 座、グレート・リーダーズ通信

『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.25

今週のキーワード！ NCPA

タタ・グループの文化貢献

タタ・グループが運営する文化団体、ナショナル・センター・フォー・パフォーミング・アーツ (NCPA) は、武藤氏曰く、「ナショナル・センター、国家的規模であると自分で言っているくらいですから」広大な敷地に、タタ・シアターをはじめ、大小のホール、展示場などが建てられている文化複合施設です。

NCPA のホームページ (<http://www.ncpamumbai.com/>)によれば、NCPA は、踊り、演劇といったインドの重要な無形の財産を後世に残し、また、新しい芸術へと発展させていこうという考えから、1969 年に開設されました。当時こうした多目的・複合文化施設は南アジアにはなく、

NCPA の創設は非常に画期的なものでした。

また、今でこそ日本でも企業イメージやブランド・イメージといった戦略面から、社会貢献(CSR)を喧伝するようになっていますが、タタの CSR は今に始まったことではなく、その動機にも武藤氏が語るように、「Give back what you get」(利益は社会に還元せよ)というタタの精神が太いしっかりした背骨のように存在しているのです。

『インド私録』では、1992 年 5 月、在ボンベイ日本総領事館が、日印外交 40 周年を記念するため、日本映画祭をはじめ数多くの文化行事を NCPA のタタ・シアターで行うことを企画、武藤氏がタタ・グループにその話を持ちかけると、タタ・シアターには長編映

されています。

映写機の寄贈式には、三菱商事の岡野常務も出席し、「三菱マーク」のダイヤの 1 つには、社会責任が込められていると語った場面では、タタに対して日本人としての面目が立った思いがします。

あれから 18 年。インドは高度経済成長を続け、タタ・シアターの映写機もさすがに最新鋭の機材に代替わりしていることと思われすが、そうした記憶は是非とも語り継がれていってほしいものです。

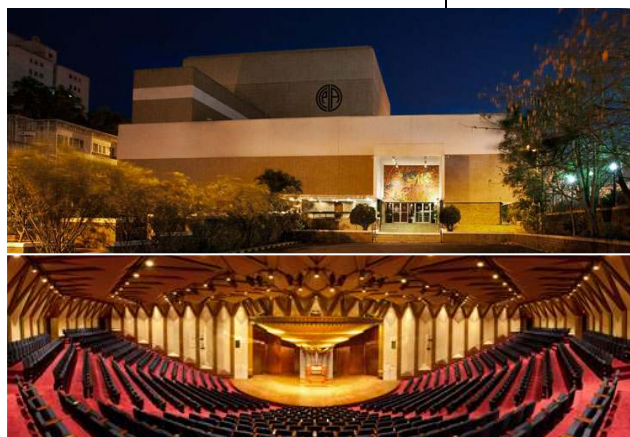
ところで、1993 年からボンベイで始まった日本映画祭では、山田洋二監督の『学校』が上映されましたが、最近では 2009 年に倉内等監督の『佐賀のがばいばあちゃん』が上映されています。こうした映画を含め、NCPA では毎年 500 以上のイベントが催されています。

第 30 回放送

公開収録はいよいよ明日

さて、「座、グレート・リーダーズ」『インド私録』の最終回の収録がいよいよ明日、行われます。お陰さまで、熱心なリスナーの方々にご参加いただくことになりました。ありがとうございます。

なお、第 27 回放送もいつも通り明日、お送りします。



(上) NCPA 外観。(下) 客席数 1,010 を誇るタタ・シアター。設計は、アメリカの著名なモダニズム建築家、フィリップ・ジョンソン。

(写真: <http://www.ncpamumbai.com/>)

画をまともに上映するための映写機がないことが判明。武藤氏が三菱商事のムンバイ支店長、江尻弘氏の協力を得て、年内に三菱商事から当時 850 万円もする映写機の寄贈を受けることができたというエピソードが紹介